

2022年度

第1回

入学試験問題
国語

試験時間 50分

注 意

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□まであり、全部で16ページです。足りないページや、印刷が不鮮明な箇所があった場合は、手をあげて監督者に申し出てください。
- 問題冊子と解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。
- 問題の内容に関する質問は受け付けません。
- 試験終了後、監督者の指示に従い問題冊子と解答用紙を提出してください。

校成学園女子高等学校

受験番号

--

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

港街の山の手にある中国人子弟のための小学校（名前をすっかり忘れてしまったので以後便宜的に中国人小学校と呼ぶことにする。妙な呼び方かもしれないが許してほしい）を訪れることになったのは、それが僕の受けた模擬テストの会場にあてられていたためだ。会場は幾つにも分かれていたのだけれど、僕の学校から中国人小学校に行くようにと指定されたのは僕一人きりだった。理由はよくわからない。おそらく何かの事務的な手違いがあったのだろう。クラスの連中はみんな近くの会場に指定されていたのだから。

中国人小学校？

僕は誰かれとなくつかまえては、中国人小学校について何か知らないかと訊ねまわってみた。誰ひとり何ひとつ知らなかった。わかったことといえば、その中国人小学校は僕たちの校区から電車で三十分もの距離にあるということだけだった。当時の僕は一人で電車に乗ってどこかに行くというようなタイプの子供ではなかったから、それは実際、僕にとっては世界の果て、というにも等しいことであった。

① 世界の果ての中国人小学校。

二週間後の日曜日の朝、僕はおそろしく暗い気持ちで一ダースの新しい鉛筆を削り、指定されたとおりに弁当とスリッパをビニールの鞆かばんに詰めた。天気の良い、少しばかり暖かすぎるほどの秋の日曜日だったが、母親は僕に分厚いセーターを着せた。僕は一人で電車に乗り、乗り越さぬようにとずっとドアの前に立ったまま外の風景に注意していた。

中国人小学校は、受験票の裏に印刷された地図を見るまでもなくすぐ

にわかった。スリッパと弁当箱で鞆をふくらませた一群の小学生のあとをついていけば、それでよかったわけだ。急な坂道を何十人、何百人という小学生が列を連ねて同じ方向に歩いていた。それは不思議といえば不思議な光景だった。彼らは地面にボールをつくわけでもなく、下級生の帽子をひっぱるでもなく、ただ黙々と歩いていた。② 彼らの姿は僕に

何かしら不均一な永久運動のようなものを想起させた。坂道を上りながら、僕は分厚すぎるセーターの下で汗をかきつづけた。

僕の漠然とした予想に反して、中国人小学校の外見は僕の小学校と殆んど変らなかつたばかりか、ずっと（A）さえしていた。暗く長い廊下、じつとりと黴臭い空気……二週間のあいだに僕が頭の中で勝手に膨らませていったそんなイメージは、何処にも見受けられなかった。洒落た鉄の扉をくぐると植込みに囲まれた石畳の道がゆるやかな弧を描きながら長く続き、玄関の正面では澄んだ池の水が午前九時の太陽を眩しく反射させていた。校舎に添って立木が並び、そのひとつひとつには中国語の説明板が吊るされていた。僕に読める字もあり、読めぬ字もあった。玄関の向うには、パテオのような形に、校舎に囲まれた四角い運動場があり、それぞれの隅には誰かの胸像や、気象観測用の白い小箱や、鉄棒があった。

僕は指示されたとおりに玄関で靴を脱ぎ、指示されたとおりの教室に入った。明るい教室には小綺麗なねあげ式の机が正確に四十個並び、それぞれの机には受験番号を書いた紙片がセロテープで貼りつけられていた。僕の席は窓際の最前列、つまりはこの教室におけるいちばん若い番号だった。

黒板はまあたらしい深緑色、教壇の上にはチョークの箱と花瓶、花瓶の中には白い菊が一輪。何もかもが清潔で、きちんと整えられている。

壁面のコルク・ボードには図画も作文も貼り出されてはいない。おそらく我々受験生の邪魔にならぬようにと、わざわざ取り外されたのかもしれない。僕は椅子に座り、机の上に筆箱と下敷を並べてから頬杖ほおづえをつけて目を閉じた。

答案用紙を小脇に抱えた監督官が教室に入ってきたのは十五分ばかり後のことだった。監督官は四十歳より上には見えなかったが、左足を床にひきずるように軽い※2びっこをひき、左手で杖つえをついていた。それは登山口の土産物屋にでも売っていきそうな粗い仕上げの桜材の杖だった。そして彼のびっこのひき方があまりにも自然に見えたので、その杖の粗末だけがいやに目立った。四十人の小学生たちは監督官の姿を見ると、というより答案用紙を見ると、しんと静まりかえった。

監督官は教壇にのぼると、まず答案用紙の束を机の上に置き、次にことりという音を立てて、その脇に杖を並べた。そして全ての席が欠員なく埋まっていることを確認すると、咳払いせせをひとつして、ちらりと腕時計を見た。それから体を支えるように机の端に両手をついたまま顔をまっすぐに上げ、しばらく天井の隅を眺めた。

沈黙。

十五秒ばかり、そのそれぞれの沈黙はつづいた。緊張した小学生たちは息をのんで机の上の答案用紙をみつめ、足の悪い監督官はじっと天井の隅を眺めていた。彼は淡い鼠色ねずみの背広に白いシャツ、それに見た次の瞬間には色も柄も忘れてしまいそうなほど印象の薄いネクタイをしめていた。彼は眼鏡をはずしてハンカチでゆっくりとレンズの両面を拭き、そしてもとに戻した。

「わたくしがこのテストの監督をいたします」。わたくし、と彼は言った。「答案用紙が配られましたら、机の上に伏せたままにしておいて下

さい。決して表向けにはいきけません。両手はきちんと膝の上に置いておきなさい。わたくしがはいと言ったら表を向けて問題にかかるように。終了の十分前になったら十分前と言います。つまらない間違いがな

いか、もう一度調べて下さい。次にわたくしがはいと言ったらそれでおしまいです。答案用紙を伏せて両手を膝の上に置くように。わかりましたね？」

沈黙。

「名前と受験番号を最初に書きこむことを、くれぐれも忘れないように」

沈黙。

彼はもう一度、腕時計を眺めた。

「さて、あと十分ばかり時間があります。そのあいだみなさんと少しばかりお話がしたい。気持を楽にして下さい」

③ふう、という息が幾つか洩れた。

「わたくしはこの小学校に勤める中国人の教師です」

そう、僕はこのようにして最初の中国人に出会った。

彼はまるで中国人には見えなかった。けれど、これはまあ当然な話だった。これまで中国人に出会ったことなんて僕には一度もなかったのだから。

④「この教室では」と彼は続けた。「いつもはみなさんと同じ年頃の中

国人の生徒たちがみなさんと同じように一所懸命勉強しております。……みなさんもご存じのように、中国と日本は、言うなればお隣り同士の国です。みんなが気持良く生きていくためにはお隣り同士が仲良くしなくてははいけません。そうですね？」

沈黙。

「もちろんわたくしたち二つの国のあいだには似ているところもありま
すし、似ていないところもあります。わかりあえるところもあるでしょ
うし、わかりあえないところもあるでしょう。それはあなたの方のお友だ
ちのことを考えても同じことではないですか？ どんなに仲の良い友だ
ちでも、やはりわかってもらえないこともある。そうですね？ わたく
したち二つの国のあいだでもそれは同じです。でも努力さえすれば、わ
たくしたちはきつと仲良くなれる、わたくしはそう信じています。でも
そのためには、まずわたくしたちはお互いを尊敬しあわねばなりません。
それが……第一歩です」

沈黙。

「例えばこう考えてみて下さい。もしあなた方の小学校にたくさんの中
国人の子供たちがテストを受けに来たとしますね。今みなさんがやって
いるのと同じように、今度はみなさんの机に中国人の子供たちが座るわ
けです。そう考えてみて下さい」

仮定。

「月曜日の朝に、みなさんが学校にやって来ます。そして席に着きま
す。するとどうでしょう。机は落書きや傷だらけ、椅子にはチューイン
ガムがくっついている、机の中の上履きは片方なくなっている。さて、
どんな気がしますか？」

沈黙。

「例えばあなた」彼は実に僕を指さした。僕の受験番号が一番若いせい
だった。「嬉しいですか？」

みんなが僕を見ていた。

僕は真赤になりながら慌てて首を振った。

「中国人を尊敬できますか？」

僕はもう一度首を振った。

「だから」と彼は正面に向きなおった。みんなの目も、やっと教壇の方
向に戻った。

「みなさんも机に落書きしたり、チューインガムを椅子にくっつけた
り、机の中のものにいたずらしたりしてはいけません。わかりました
か？」

沈黙。

「中国人の生徒たちはもつときちんとした返事をしますよ」

はい、と四十人の小学生たちが答えた。いや三十九人。僕には口を開
くことすらできなかった。

「いいですか、顔を上げて胸をはりなさい」

僕たちは顔を上げて胸をはった。

「そして誇りを持ちなさい」

(村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』)

※¹ パテオ…スペイン語で中庭のこと。

※² びっこ…片方の足に障害があつて、歩くときにつりあいが取れないこと。現
在では差別的な表現とされている。

問一 空欄（A）にあてはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現実離れ イ 垢^{あか}抜け
ウ 代わり映え エ 雲隠れ

問二 傍線部①「世界の果ての中国人小学校」とありますが、この表現に込められた「僕」の思いの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 港街の山の手にある中国人小学校に行くことは、「僕」にとって初めての体験であり、不安と共にささやかな冒険心をかきたてるものだった。

イ 事務的な手違いのために中国人小学校で模擬テストを受けることは、「僕」にとって納得のいかないことであり、果てしない苦痛を感じさせるものだった。

ウ 電車で三十分もかかる距離にある中国人小学校に一人で行くことは、「僕」にとって全くの未知の体験であり、少しも気乗りすることではなかった。

エ 級友たちと離れて中国人小学校に行くことは、「僕」にとって深い孤独感を覚える体験であり、けっして受け入れられるものではなかった。

問三 傍線部②「彼らの姿は僕に何かしら不均一な永久運動のようなものを想起させた」とは、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 列を連ねて黙々と歩く小学生たちの姿が、生き生きとした子どもらしさを感じさせず、それぞれが機械的に動いているように見えたということ。

イ 中国人小学校に向かって歩く何十人、何百人の小学生たちが、全て同じ姿勢で同じ動きをする同一人物のように見えたということ。

ウ 本来はふざけたり遊んだりしたいのを我慢して試験会場に向かう小学生たちの姿が、不満を抱えながら歩き続けるロボットのように見えたということ。

エ 試験を受けるために同一方向に歩いている小学生たちが、永遠に会場に到着しないと思われるほどゆっくり歩いているように見えたということ。

問四 傍線部③「ふう、という息が幾つか洩れた」とありますが、これと対照的な表現を含む一文をこの傍線部より前から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 傍線部④「『この教室では』と彼は続けた」とありますが、中国

人の先生は、どのようなことを伝えるために日本人の小学生たちに語り始めたのでしょうか。六十字以内で説明しなさい。

問六 本文の表現の特徴に関する説明として、最も適当なものを次の中

から選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」と中国人教師の心情および関係性の変化が細かく直接的に表現されていることが、クライマックスでの教師の発言が感動的に響く効果を生み出している。

イ 小説の語り手は主人公の「僕」自身だが、過去を回想する形をとっているため、現実から遊離した幻想的な雰囲気が出ている。醸し出されている。

ウ 中国人教師が冗舌に語るのに対して、「僕」や日本人小学生たちがほとんど言葉を発しないさまは、語り手によってその対比が際立つように表現が工夫されている。

エ 中国人教師の発言を中心とした会話文の密度が高いのに比べて、小説全体における人物描写や情景描写は詳細にならないように抑制されている。

問七 以下の対話文は、今から一週間後、この入試問題を解いた三人の

受験生たちが集まって対話しているという想定のもので、これを読んで、後の問いに答えなさい。

生徒A 試験会場が舞台の小説を実際の試験会場で解くって、不思議な感覚だったね。

生徒B うん、私も同じことを感じた！ 佼成女子の先生はどうしてこの小説を入試の素材にしたのかなあ。

生徒C 国際的な教育に力を入れている学校だから、中国人の先生が出てくる小説にしたんじゃない？

生徒A それってちょっと安直な気がするけれど…

生徒B 単に中国人の先生が登場するからというより、主人公にとって初めての異文化理解の体験が描かれているからじゃないかなあ。

生徒C なるほど。外国にルーツを持つ人と一緒に社会を構成するという(①)の理念にもつながる話だね。

生徒A そうね。でも、もしかしたら、単純に村上春樹が好きで先生がいるっていうだけかもよ。

生徒B はは、ありえるね。ところで、村上春樹って誰？

生徒C え、知らないの？ 世界一有名な日本人小説家だよ。

生徒B ああ、『(②)』の作者だった。

生徒C そうそう。

生徒A 私、気になって、今回の入試の出典となった『中国行きのスロウ・ボート』の文庫本を買って読んでみたんだ。

生徒B すごい！

生徒A あの話、実は続きがあったね。主人公の少年が高校生になって、

彼女との初デートに、あの中国人小学校がある街へ行くんだよ。

生徒C えー、気になる！

生徒B 私も気になる！

生徒A 絶対読んだほうがいいよ。デートの後、高校生の「僕」が目を閉じて、一つの罪をひそやかに想像するんだけど、そのしめくくりの言葉にしびれるよ。

生徒B もしかして、その言葉って、(③) じゃない？

生徒A あたり！

生徒C すごい！ 入試で読んだ本文にも出てきた言葉だよ。反復がとても効果的だなんて思った。

生徒A そうそう。小説の力って、ほんとすごいと思う。

生徒B 高校入学までに、いっぱい本を読もう。そして、私たちも誇りをもって高校生になりましょう。

生徒C うまいこと言うね！

(1) 空欄 (①) にあてはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 多文化共生
- イ 外国語学習
- ウ 情報化社会
- エ 持続可能性

(2) 空欄 (②) にあてはまる作品として正しいものを次の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 坊っちゃん
- イ 1Q84
- ウ 銀河鉄道の夜
- エ 人間失格

(3) 空欄 (③) にあてはまる語を小説の本文中から漢字二字で抜き出しなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

わたしがまだ幼かった頃——保育園か、小学校の低学年の時分のことであつたと思う——三時のお茶の時間、母や祖母の茶飲み話の多くは、戦争時代の思い出話だつた。

おやつを食べては、ママが子どもの頃はこんなに美味おいしいお菓子は食べられなかったという話になり、薩摩芋さつまいものお菓子を食べれば、そういえば戦時中は、お芋ばかり食べていたものだったという話になる。あの頃は何かにつけて、「そういえば戦時中は」という言葉が、「昔むかしあるところに」といった言葉と同じように、物語が説き起こされる日常的な^{※1}クリツシエとして語られていたように思う。そして、母と祖母のあいだで、ひとしきり、戦中戦後、食糧難であつた頃の思い出話に花が咲くのがつねだつた。

子どもだつた母が、鶏肉とりにくと言われて、久々に食卓に登場した肉を兄と喜んで食べたなら蛙かえるであつたことや、あまりにひもじくて、お手玉をほどこいてなかに詰まつた生の小豆を食べてお腹なかをこわしたことが、そういえば疎開先の山形で食べたくるみ餅はなんて美味しかっただろうねえ、話はそこから、山形に向かう途中、列車が空襲に遭い、荷物を抱えて田んぼのなかを親子で逃げまどつた話になり——戦闘機が頭上を飛び交うその下で、お母さんはもうこれ以上走れないから、あんなだけ逃げなさいと言つた祖母を、幼い母が励まして、手を引いて逃げたという話をたがいに語りあつては、二人はたいそう感動する——戦中戦後の苦しかった時代の記憶がひとしきり語られたあと、最後はいつも、本当に戦争が終つてよかつたねえという話で終わる。^{※2}玉音放送を聴いたとき、ああ、これでマサヒサが金輪際、兵隊にとられないですむ、死なないです

20

15

10

むと思つて本当に嬉うれしかった、と祖母はしみじみと語る（玉音放送なんて何を言っているのか、さっぱり分からなかつたわ、横から母が言う）。あのまま日本が勝つて、戦争が続いていたらと思うとぞつとする。みんな、戦争なんかいやだつた、でもあの当時はそんなこと言えなかつた（どうして言えなかつたの、と幼いわたしが訊きねる。母はわたしを睨にらんで、そういうことが言える時代じゃなかつたの、とわたしを叱る）。特攻隊の人たちだつて、天皇陛下万歳と言つて死んでいった人なんて誰もいない、最後はみんな「お母さん」と叫んで、死んでいったんだものねえ、と二人の母たち——わたしの母と、母の母——は、茶をすすりながらうなずきあう。その二人の確信ぶりが、わたしにはなぜか強烈に残っている。どうして、飛行機のなかでひとり死んでしまった者が最後に何と言つたかなどということが、分かるのだろうか幼な心にも不思議に思つたものだが、母と祖母の強い確信ぶりを見ると、そのような質問をするのが、何かいけないことのように、はばかりれたのを覚えている。

早くにして夫に死に別れ、貧しいなかで二人の子どもを女手ひとつで育てていた祖母の戦中戦後の生活が、困難なものであつたことは想像に難くない。戦争が終わつて二十年あまりがたち、生活もどうやら落ち着いて、「あの頃」の苦勞を思い出として語る余裕もようやく出たのである。二人にとって「いまの幸せ」というものが、しみじみとありがたいものであり、日常の折にふれ、その幸せを確かめずにはおれなかつたのだろう。

幼かつたわたしにとっては、母が子どもの頃の話など、大昔の出来事のように思われた。（1）、大人になつたいま考えてみれば、それはたかだか二十数年前のことに過ぎず、当時の母や祖母にしてみれば、いまのわたしが中学・高校時代を思い出すような近しさでもって、それら

45

40

35

30

25

の出来事を語っていたのだということに気づいたとき、自分が生まれるはるか昔に終わったと思っていた戦争という出来事が、実はまだまだ色濃く影を落としていた時代に自分は生まれたのだということであらためて実感した。そういえば、あの当時、テレビドラマでは、戦争の記憶が物語の端々に顔をのぞかせていたし、街へ出れば、ガード下で、包帯姿の傷痍兵が聴く者を不安にさせるような寂しげな音色でアコーディオンを弾いていたものだ。

募金箱を首から下げ、アコーディオンを弾いている傷痍兵の姿に、わたしは募金しないのと言うと、母はその必要はないと言った。街で募金活動に出会うたびにわたしに十円硬貨を握らせては、募金してらっしゃいと言う母がなぜ、今日に限ってそう言うのかわたしには分からなかった。戦争はもう何年も前に終わって、みんな、おばあちゃんだっママだっ戦争のせいで苦労したけど、頑張っって、一所懸命働いて生活しているのに、あの人たちは戦争で怪我したからと言って働かないでずっつと、昔の戦争を引きずっているのだから、そういう人は助けてあげる必要はないのだと母は言った。街角からアコーディオンを弾く傷痍兵の姿が消えたのちも、そんな母の言葉が、三十年以上もたつ今日まで、わたしの記憶のなかに忘れられずに残り、ふとした拍子に、軍服に包帯をした兵士の姿と、あの不安をかき立てるようなアコーディオンの音色といっしょに甦^{よみがえ}ってくるのは、幼いわたしが母のその説明に決して納得しなかったからだろう。敵艦に突っ込みながら「お母さん」と叫んで死んでいったという特攻隊員の話に、なにか納得のいかない違和感^②のようなものを感じていたように（だからこそ、そのことをよく覚えていたのだ）、戦後二十年以上たつその当ても戦時中の思い出を祖母と日常的に語っているその母が、戦争を引きずっているからという理由で、傷

50

55

60

65

70

痍兵に同情するのを拒むことに、わたしは、幼いながらに得心のいかなぬものを感じていたのではないかと思う。「矛盾」という言葉はその当時まだ知らなかったが、幼いわたしが感じていたのは、母の言っていることは矛盾している、という感覚であったのではないだろうか。だが、^③今、あらためて考えてみると、それが決して矛盾ではないことが分かる。

疎開先の山形で言葉がまったく通じないで「しゃもじ」ひとつ買うにも苦労したと、そして、その山形弁で「しゃもじ」を何と買ったか思い出しては、母と祖母は目に涙をためて、いつも笑い転げたものだ。母と祖母の戦争の思い出話は、どこか懐かしげな響きさえ感じられたものだった。母にとって、そしておそらくは祖母にとっても、戦争は、明白に、過去の出来事であったのだろう。（2）それを折に触れ思い出しては、その経験の数々を安心して語ることができたのではないか。時には笑いさえしながら。たしかに戦争で苦労したに違いない。だが、幸いなことに、母も祖母も、戦争という出来事で肉親を亡くすという経験はしていない。そして、戦中戦後の苦労は、「いまの幸せ」によって報われてもいるのだ。

街角の傷痍兵の戦争の記憶は、しかし、決してそのようなものではなかっただろう。日本社会が奇跡の復興を達成し、高度経済成長をまっしぐらに邁進^{まいしん}しているという物語^Aのなかで、傷痍兵は、そのような物語からはこぼれ落ちる出来事^{あか}の存在を証しているのではないか。戦争など、実は決して終わってはいないことを、私たちが生きている（現実）が実は虚偽^Bの物語^Bであることを、訴えているのではないか。街角で、はからずも出会ってしまう傷痍兵は、すでに別の物語^Cを生きている者に、完結したはずの物語^Dが実はいっこうに終わってはいないことを、

75

80

85

90

95

出来事がなお現在形で続いていることを突きつける。傷痍兵に対する嫌悪を露にした母が否認しようとしたのは、まさにそのことであつたのではないか。

今、あらためて思う。戦後四半世紀が過ぎてなお、街角で、自らが被つた出来事の不条理を国民に訴えていた者とは、いったい、いかなる者であつたのか、と。

(岡真理『記憶／物語』)

*作問の都合上、改変した箇所があります。

※1 クリッシエ……ありきたりな決まり文句。

※2 玉音放送……一九四五年八月十五日正午に放送された、昭和天皇が自ら第二次世界大戦での日本の降伏を国民に伝えたラジオ放送のこと。

※3 傷痍兵……戦闘や公務で負傷した軍人。

問一 本文の空欄(1)、(2)に当てはまる語として最も適当

なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だが イ だから ウ あるいは

問二 二重傍線部a「ひとしきり」、b「はばかられ」の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a ア ほんの一瞬。
イ 長い時間。
ウ しばらくの間。

b ア 気を遣って遠慮せざるを得ないこと。

イ 気恥ずかしいと感ぜられること。
ウ 罪の意識を持つこと。

問三 傍線部①「母はその必要はないと言った」とありますが、その理由を述べている一文を抜き出し、初めの五字を答えなさい。

問四 傍線部②「違和感のようなもの」とありますが、その内容を具体的に述べている部分を五十字で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問五 次の会話は、傍線部③「今、あらためて考えてみると、それが決して矛盾ではないことが分かる」について、話し合っているものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

生徒A 幼い「わたし」は、母が傷痍兵に同情するのを拒む理由に対して、「矛盾」していると考えているね。

生徒B そうね。母と傷痍兵は戦争を引きずっているという点で同質のものにとらえられているわ。

生徒C それなのに大人になった「わたし」は矛盾ではないと考えている。それはなぜかしら？

生徒A 母は戦争で肉親を失うという経験をしてはいない。そして、戦中戦後の苦労は、Xによって報われてもいるのだ、と述べられているわ。つまり、母にとっての戦争は安心して語れる思い出になっているのだと思う。

生徒B それに対して傷痍兵は戦争で癒やしようない傷を心身に負い、それを今も抱えて生きている。彼らにとって、戦争は決してYではないのね。

生徒C なるほど。ということは、母と傷痍兵は同質どころか、むしろ決して相容れない存在なのね。母にとって傷痍兵は現在の自分の生活が虚偽であることを暴き立てるものであり、嫌悪し、Zすべき存在なのね。

(1) 傍線部1について、母が傷痍兵に同情するのを拒む理由の矛盾とはどのようなことですか。文中の語句を用いて五十字程度で答えなさい。

(2) 空欄 X に当てはまる語句を文中から七字で抜き出して答えなさい。

(3) 空欄 Y に当てはまる語句を文中から六字で抜き出して答えなさい。

(4) 空欄 Z に当てはまる語を文中から二字で抜き出して答えなさい。

問六 波線部A～Dの「物語」の中には一つだけ、他とは内容が異なるものがあります。その記号を答えなさい。

問七 本文の表現と内容について、次のア～エの中から適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 八〇行目から始まる母と祖母の山形での思い出話は、「わたし」にとっても懐かしく微笑ましいものとして心に残っている。

イ 九五行目に「私たち」という言葉が用いられているのは、筆者が提示する問題が母だけではなく日本の社会全体に横たわるものであることを示している。

ウ 九五行目の「〈現実〉」に「〜」がつけられているのは、その内実が真に「現実」と言えるものではないことを表している。

エ 一〇二行目から始まる最後の段落は、自問する形式で結ばれているが、読者にも問いの答えを考えさせる効果を持っている。

問題は次のページに続きます。

【三】文章Ⅰとそれについて書かれた文章Ⅱを読んで後の問いに答えなさい。

Ⅰ

※1 宇治殿、※2 四条の大納言公任卿と、「春秋の花、いづれかすぐれたる」と※3 論ぜさせ給ひけり。①「春はさくらをもて第一とす。秋

は菊をもて第一とす」と、宇治殿おほせられければ、大納言、「梅の候はんうへは、桜第一にてはいかが候ふべき」と申されければ、梅と桜との論になりて、自余の花の沙汰はつきになりけり。大納言、おそれをなして、つよく論じ申されずながら、「なほ春の曙に紅梅の艶色すてられがたし」と申されける、優にぞ侍りける。

(『古今著聞集』)

※1 宇治殿……藤原頼通。藤原道長の長男。摂政などを歴任した権力者であった。

※2 四条大納言公任…藤原公任。藤原道長と同年。政治の中心から徐々に逸れていくが、和歌の世界の第一人者であった。

※3 論ぜ……比較してどちらが良いか議論すること。

II

公任は花についても^{※1}「一家言^{いっかげん}があつたらしい。宇治殿頼通と公任とが、春秋の花は何がすぐれているかということを議論した。春は桜が第一、秋は菊が第一だというのが頼通の主張である。まずはこれが常識的な線であろう。それに対して公任は、「梅の候はむうへは、桜第一にてはいかが候ふべき」と反論した。それで梅桜優劣論となつて、他の花についての議論はあとまわしになつてしまつた。公任は頼通の権威を恐れ、強くは主張しなかつたものの、「なほ春の曙^{あけぼの}に紅梅の艶色^{えんしよく}捨てられがたし」と言つたというのである。

公任は白川の山荘に紅梅を植えていたというから、口先^{くちさき}だけではないことが知られる。

ところで、『古今著聞集』によれば桜派の頼通が、紅梅の歌を詠み^よ、しかもそれが彼の名歌とされているのだから面白い。

宇治殿、南面の紅梅に雪の積もれるを御覧じて、人を召^めして折らせ給ひて、

^{※2}をられけりくれなるにほふ梅の花けさ下枝に雪はふれども

(続古事談・第二)

公任に^{※3}啓発^{けいはつ}されて、政治家頼通も春の曙の紅梅の艶色を賞^めでるまでに進歩したのであるうか。白梅ならば春の闇にほんのり白く浮き出る夜の梅もよからうが、紅梅は確かに春の曙や雪を背景とした時にその色が映えるに違いない。紅梅を賞すべき適切な^{※4}折節^{おりふし}を^{※5}ずばりと言つてのけた公任は、やはりすぐれた見巧者^{みこうしゃ}である。

(久保田淳『花のもの言う 四季のうた』
*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

^{※1} 一家言……独自の意見。その人独特の主張や見識。

^{※2} をられけりく雪はふれども

……上手く折ることができたよ、紅の色も鮮やかな梅の花を。今朝は下の枝に白い雪が降っているけれど。

^{※3} 啓発……人が気づかない点を教示して、より高い認識に導くこと。

^{※4} 折節……ちょうど良い時節。場合。機会。

^{※5} 見巧者……物の見方が上手な人。目利き。

問一 二重傍線部A「いづれ」、B「なほ」の読み方を現代かなづかい（ひらがな）で答えなさい。

問二 傍線部①「春はさくらをもて第一とす。秋は菊をもて第一とす」は誰の発言ですか。その人物の名前を**文章Ⅰ**の中から三字で抜き出しなさい。

問三 傍線部②「梅と桜との論になりて、自余の花の沙汰はつきになりにけり」とはどのような意味ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 春の花には梅と桜と自余の花があるが、どれが良いのか結論がでなかった。

イ 梅の花と桜の花の美しさは、春に咲く他の花とは比べものにならないとわかった。

ウ 梅と桜と菊の花の美しさを比べることだけになって、他の花の話はできなかった。

エ 梅と桜のどちらが春の花としてふさわしいかという話になって、他の花の話は二の次になった。

問四 傍線部③「春の曙に紅梅の艶色すてられがたし」とある部分について、その理由を**文章Ⅱ**の語句を用いて、二十五字以内で説明しなさい。

問五 **文章Ⅰ**と**文章Ⅱ**に書かれている人物の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 宇治殿頼通は、桜の花こそ春の花の筆頭であると信じ、梅の花の美しさには惑わされないひたむきな人物といえる。

イ 宇治殿頼通は、春ならば桜が一番美しく、秋は菊が一番美しい花であるという日本の美意識を創り出した人物といえる。

ウ 四条大納言公任は、紅梅を見るのにちょうど良い時節を発見できるような、物事を見るのに優れた人物といえる。

エ 四条大納言公任は、時の権力者である頼通に対しても恐れることなく正々堂々と紅梅の美しさを主張した人物といえる。

四

各傍線部の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 春はるになって寒さが和ならぐ。
- ② 人の生き方は千差万別ちんさばんべつだ。
- ③ 速すみやかに行動する。
- ④ 試合でひざを傷いためる。
- ⑤ 企画の意図いどうを説明する。
- ⑥ 議案はイギいぎが続出し、否決ひけつされた。
- ⑦ 学問をオサおさめる。
- ⑧ 通学時間がタンシユクたんしゆくされる。
- ⑨ 意見をソツチヨクそつちよくに話す。
- ⑩ 馬が草原をカかける。